平成 30 年 10 月 10 日
学校整備計画審議会 資料 1
教育部　教育総務課

益田市における今後の学校のあり方（事務局案）

1．益田市の現状と今後の教育施設のあり方について

これまで、学校施設（市が設置する小中学校）は学校教育を行う場としてその役割を果たしてきた。一方で、地域づくり・ひとづくりは、社会教育事業が中心となって各地区 20 の公民館を中心に行われてきている。

現在、人口減少社会に突入し、公共施設に関する財政負担の軽減･平準化と最適な配置を実現するため、「益田市公共施設等総合管理計画」[1]も策定されるなど、公共施設の設置について見直しを行っている。また、国・県挙げての小さな拠点づくりも併せて推進している中で、施設の集約化･多機能化を含めた施設そのものの考え方を変えていく時期にも来ている。

これからの学校教育の向かう姿[2]、益田市の将来、双方を考えたとき、学校というもののあり方（機能・施設）を今一度捉えなおす必要がある。

2．「ひとが育つまち益田」の実現

益田市総合戦略では、「それぞれの施策を担う人材、そして幅広く将来の地域を担う人材の育成は不可欠の要件」とし、「ひとが育つまち益田」の実現を目指している。[3]

また、教育に関連する各計画においても「ひとが育つまち益田」の実現に向け、「地域ぐるみで子どもを育てる[4･5]・地域総がかりで多様に関わる[6]」ことを示すとともに、「未来の益田市を担うひとづくり」を中心とした施策を行っている。

特に小中学校期においては「ライフキャリア教育」[7]として「ロールモデルと出会い・ふれあい・ともに活動」をすることで、より多くの子が「将来世界で活躍するだけではなく、益田を活躍の場としても選択する」ということを目指して様々な取組を実施している。[8]

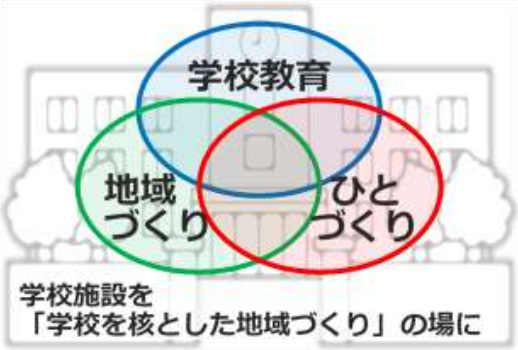


図１：学校を核とした地域づくり

これらを着実に行うには、子どもたちの学びの場である学校施設を、「学校教育」「地域づくり」「ひとづくり」を三位一体とした、学校を核とした地域づくりの場に転換させていく必要がある。

---

1 H28.12 策定 将来負担の軽減を図り持続可能な市政運営の実現を目指し、保有する施設の「長寿命化の推進（目標使用年数 65 年以上）」「総量の適正化（延床面積を 30 年間で 30%縮減）」「民間活力の導入」を基本方針としている
2 中央教育審議会においては「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携･協働の在り方と今後の推進方策について」として、時代の変化に伴う学校と地域の在り方について答申を行っている（H27.12.21 答申）
3 「まち･ひと･しごと創生 益田市総合戦略」第Ⅲ章 1．基本的な考え方　より
4 「益田市教育ビジョン」重点目標(4)学んだことを自分の言葉で表現できる子ども・(5)自分の言動を振り返ることができる子ども　より
5 「益田市社会教育推進計画」基本目標(1)就学前機関･学校･家庭･地域が連携した教育の推進・(3)ふるさと教育の推進より
6 「益田市の未来を担うひとづくり計画」第２部 2-1 ③地域総がかりで多様に関わり、人生の足場をつくる　より
7 「益田市の未来を担うひとづくり計画」　第２部 2-2 人生観を育むライフキャリア教育へ　より
8 「益田版カタリバ」「職場体験」「夢の教室」など、大人と子どもが本音で対話する場作りを小中学校でも実施

学校は、子どもたちの「確かな学力(知)･豊かな心(徳)･健やかな体(体)」をバランスよく育む場[9]であり、そのことは今後も変わらず推し進めていく。その上で「ひとが育つまち益田」を実現させ、持続可能な地域としていくためにも、これまでの学校のあり方（機能・施設）を変えていくべきである。

３．小学校･中学校期に行うひとづくり

本市の教育(の振興のための施策)に関する基本的な計画である、「益田市教育ビジョン」では、重点目標として、

１）ふるさとのよさを理解する子ども【郷土愛】
２）自分の夢に向かってたくましく生きる子ども【不撓不屈】
３）心身ともに健やかで意欲的に活動する子ども【活力】
４）学んだことを自分の言葉で表現できる子ども【発信力】
５）自分の言動を振り返ることができる子ども【自律】
６）他者と支え合うことに感謝できる子ども【支え合い】

の６つを益田市で育てる子どもたちの理想の姿として示している。

小中学校では、これまでと同様、学校教育においてこれらを着実に行っていくことを基本とし、その上で、「ひとが育つまち益田」の実現に向けて、「未来の益田市を担うひとづくり」を推進していくべきと考える。

小学校･中学校期におけるひとづくりの取組は次のとおりである。

（１）小学校期

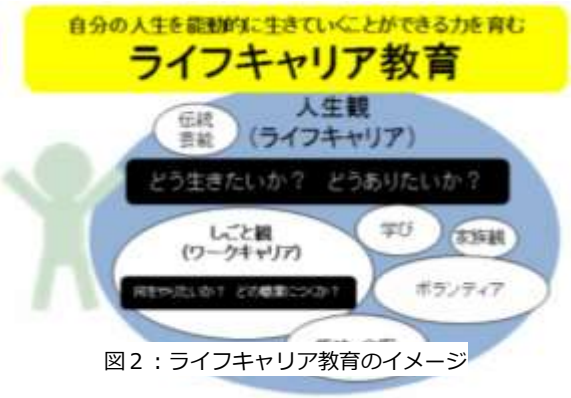


図２：ライフキャリア教育のイメージ

ア）ライフキャリア教育では、地域で暮らし活躍する人との出会いを通じ、現在の益田市像を知る活動を行う。できるだけ多様な人材と出会い、話しを聴いたり、質問をしたりするコミュニケーション活動を重視する。[10]

イ）「地域全体が学習の場であり、地域の人みんなが先生」と考え、できるだけ多様な人材と出会い、話を聴くことなどを通して地域を知る活動やコミュニケーションの場を重視する。

ウ）これらを行うため、学校施設をより開いた空間として有効に活用し、子どもたちを育む機能を高めていく。

---

[9] 現行 学習指導要領の基本的な考え方　より
[10] 益田市の未来を担うひとづくり計画　第２部 2-5②　より

（２）中学校期

ア）ライフキャリア教育では、中学生の活動フィールドは小学校で培った人間関係を活かして、学校だけではなく公民館等を中心とした地域にひろがっていくことを目指しており、多様な価値観に触れる機会を創出し、地域社会を「自分が行動する･活躍する場」として掴みとっていくことに重点を置いている。[11]

イ）多様な環境に関わることで、多様な経験をし、多様な力を身に着けることができる。様々な人と、様々な環境で過ごす時間をできるだけ多くすることで、教育の質と量を担保し、大人になった時の生き方の選択肢を広げていくことにつながる。

ウ）自分らしい人生観を追い求めるためには、対人関係やコミュニケーションを必要とする社会力を持つことで、より豊かな経験を積むことができる。

また、中学校は教科担任制をとっているため、小規模になりすぎることで専任の教科担当教員が配置できず、免許外教科担任や非常勤講師による教育の実施が避けられないことから、教科指導を充実させるためには一定規模が必要となってくる。また、規模が小さいことで、課外活動が制限されるなど、小学校とは異なる考え方で教育環境を検討する必要がある。

（３）小学校期、中学校期共通

ア）将来に向けて視野を広げ、また、益田市を担っていく人材を育成するため、可能性を広げることのできる教育を推進していく。

イ）教育プログラムや活動を通じて、成長に応じた体験を積み重ねていくことが自己発見や自己成長につながる。安心してチャレンジできる教育環境が必要。[11]

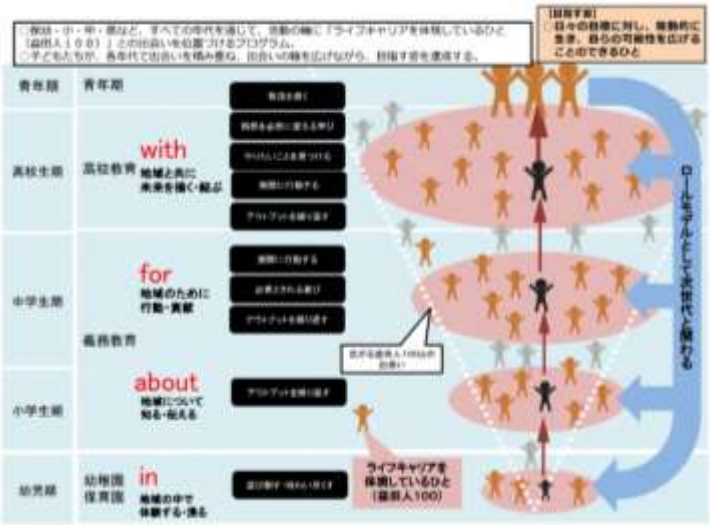


図３：ライフキャリア教育の流れ

これらを進めることにより「ひとづくり協働構想」に掲げる、

ア）将来の益田市を支えるため、自らの可能性を広げることのできるひと。

イ）しごとを継続発展させるひと。しごとを創り出せるひと。

ウ）地域のひとと協力し、地域を支えるひと。地域の資源を活かせるひと。

を育てていくことにつながると考える。

---

[11] 益田市の未来を担うひとづくり計画　第２部 2-1①　より

４.今後の学校施設のあり方

前項を踏まえて、小学校・中学校に分けて方向性を検討した。

（１）小学校

ア）学校施設を社会教育の場としても活用し、様々な人たちが学校に入り、子どもたちとふれあうことで、他者との関係性を構築する機会を増やしていくことができる。そのことが「この地で活躍する自分の将来像」を思い描くという教育の質を高めることにつながる。

イ）市の現状や、目指している市の姿を踏まえ、「学校教育」「地域づくり」「ひとづくり」を三位一体とした「学校を核とした地域づくり」への転換を行う時期に来ている。

ウ）これまでの再編計画で再編対象校としてきた校区も、まずは「学校を核とした地域づくり」への転換を図る。

エ）ついては、地域自治組織等を中心に地域全体で子どもたちの育ちを支えていく仕組みを作っていく。

これらを進める上では、

・地域は学校を核とした地域づくりを推進し、持続可能な地域づくりを目指す。

・極小規模の学校において集団での教育が必要なものについては、別途教育委員会が方策を考える必要がある。

・また、あまりにも極小規模となり、学習や学校運営に支障をきたす場合、学校、地域、行政が一体となって十分協議する必要がある。

ことにも留意する必要がある。

【 小学校 】

益田市の将来を考えたとき、子どもたち一人ひとりが「この地で活躍する自分の将来像」をしっかり思い描けるように、地域全体で子どもたちの育ちを支えていく「学校を核とした地域づくり」を目指していくことが最重要と考える。

◇ **具体的な小学校像**

「益田市教育ビジョン」に示している地域に根差したふるさと教育を大切にしながら、子どもたちの豊かな心･体を育む。今後は、これを学校だけではなく、地域の人たちと一緒に、力を合わせて育てる小学校としていく。

（２）中学校

ア）中学生の時期は、義務教育の最終段階であると同時に、将来、ひとりの社会人として生きていくための最終準備段階であるといえる。

イ）また、発達段階における中学生の時期は、思春期を迎える仲間たちとコミュニティをしっかりと構築することを通して、その集団の中での社会性を養っていくことが重要な時期でもある。

ウ）多感な思春期を過ごす中学校期においては、小学校以上に生徒男女比のバランスを考慮すべきである。

エ）これら、子どもの発達段階における学校教育、また、ひとづくりの考え方を踏まえていくならば、中学校の配置を見直していく必要がある。

【 中学校 】

思春期段階にあるこの時期は、同世代によるコミュニティによって、しっかりと社会性を身に着けることが必要な時期である。
また、地域の多様な大人と関わっていく活動は、発達段階に応じて学校という枠から公民館等を中心とした地域にそのフィールドを移していくべきと考える。
中学校期における「ひとづくり」を推進していく上でも、1 学年複数クラス（36 名以上）の確保を目標とし、再編を検討する。

◇ **具体的な中学校像**

発達段階に応じた集団とすることで、ひとづくりも含め、以下のような益田市でしかできない魅力的な中学校としていく。

・相手を思いやる心や、子ども同士で支え合う気持ちを育むため、より多くの同年代の中で「学び合い学習」等の機会を多く創出する中学校

・保幼小中高の更なる連携や課外活動の充実など、他市の人でも益田市の中学校で学びたいと思えるような中学校

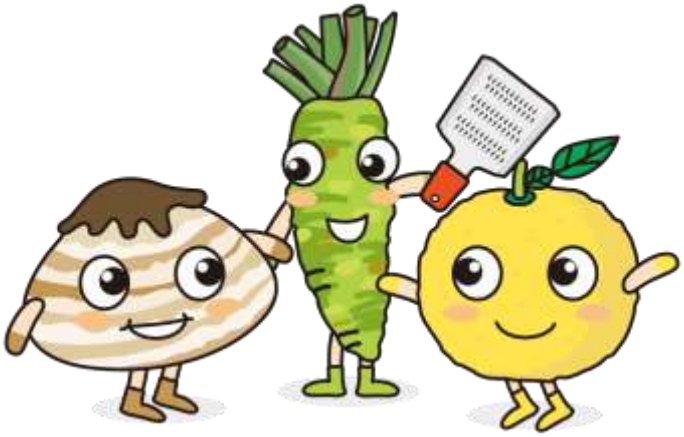
・その地域のよさや課題について小中学校期を通して学び、ふるさとを誇りに思う子どもが多く育つような中学校

５．おわりに

これまで述べてきたように、今後の学校施設、特に小学校においては、学校教育のみならず地域づくり･ひとづくりを行うための、地域全体で子どもたちの育ちを支えていく「学校を核とした地域づくり」を進める場とすることが、持続可能な益田市としていくことにつながると考える。本市では原則として各地域の範囲内に小学校がある。地域住民と教員がより深くつながることで、小学生の学びをより豊かにすることにつながっていくものと考える。

一方、中学校において、中学生はその成長にあわせて、小学校で培った経験をさらに発展させていく必要がある。中学校期に様々な人との対話を通してともに活動することで、大人になった時の生き方の選択肢を広げていくことにもつながることから、学校施設の配置を見直し、より多くの仲間たちと集団での活動を通じて、同年代の中でコミュニティの構築や社会性の大切さを養っていって欲しいと考える。

これらのことから、本市における今後の学校のあり方を、

「小学生は地域で育て、
中学生はより多くの同年代の中での育ちを促す」

という考え方のもと検討されたい。